「地理A」及び「地理B」の総合としての新「地理」

小倉幸春（社会科）

今回の高校学習指導要領の改訂において、従前の、系統地理的な学習を中心とする「地理A」と世界の地域的な学習を中心とする「地理B」の内容が総合され、新しく「地理」となった。社会科では「現代社会」が新設され、必修はこの1科目のみとなり、選択科目の「地理」は、「日本史」、「世界史」とともに標準4単位履修とされる。

この「地理」の学習指導における若干の問題について、これから考えてみたい。

新「地理」の内容の特色

先ず、学習指導要領における新・旧科目の学習内容についての規定を引用し、そこから新「地理」の内容の特色を考えたい。

従前の「地理A」の内容

高校地理教育において主流を占めてきた系統地理的分野を中心とする科目であった。

(1) 生活と地理
　ア　生活圏の拡大と地理的知識の発達
　イ　地図とその利用
　　地図の種類と用途
　　読図と地図作業
　ウ　野外調査
(2) 居住と環境
　ア　人間と自然環境
　　気候と生活
　　地形と生活
　　水と生活
　　世界の自然地域
　イ　自然環境と社会環境
　ウ　世界の人口
　　人口分布と人口密度
　　人口の増減と移動
　エ　村落・都市
　　村落の立地
　　都市の機能
　　都市の分布と配置
　　都市化現象
(3) 資源と産業
　ア　農牧・林・水産業
　　農牧業の基本的性格
　　世界の農牧業地域

林業と森林の分布
水産業と漁場の分布

イ　鉱工業
鉱工業の基本的性格
動力資源の開発
鉱産資源とその開発
世界の工業地域

ウ　商業・交通
商業の機能と生活
交通の機能と生活
消費とその地域的性格

(4)　国家と世界

ア　国家
国家と民族
国家の領域と国境

イ　国土の開発と保全
資源の開発と保全
水の利用と統制
社会開発と生活環境の整備
国土の再開発

ウ　世界の結合
交通・通信の発達と世界の縮少
世界の貿易とその動向
国家群の形成と国際協力

エ　世界と日本

従前の「地理Ｂ」の内容

高校地理教育において、最初の、世界地誌（地域）的内容の学習を中心とする科目であった。

(1)　人間と地球

ア　生活圏の拡大
生活舞台としての地球
世界の拡大と縮少
地図の利用

イ　居住と環境
世界の人口分布
人類の諸集団
生活基盤としての自然

ウ　地理と地域区分
生活と地域
地域区分の意義
さまざまな地域区分

エ　地域の調査

(2) 世界の諸地域

世界をいくつかの地域に区分し、それぞれの地域で取り扱う内容については、以下の諸項目を考慮して適切に構成すること。

ア 位置・領域と歴史的背景

位置・領域の特色

歴史的背景

地域の構成

イ 自然環境の特色

ウ 住民と人口

住民とその民族構成

人口の静態と動態

村落・都市

生活、社会、文化の特色

エ 産業・経済の現状と動向

資源とその開発

おもな産業

交通と貿易

地域開発とその動向

オ 日本との関係

(3) 世界の結合

ア 世界の地域構成と結びつき

国家と国家群

世界の交通・貿易

国際協力

イ 世界と日本

新「地理」科の内容

再び系統地理的内容と地誌的内容とが一科目のなかに統合されることになった。

(1) 人類と地球

ア 人類の諸集団と生活

イ 生活舞台としての自然

ウ 自然環境と社会環境

エ 地図の利用

(2) 人口と資源・産業

ア 人口の地域的特色

人口の分布と増減

人口構成

イ 食料の生産と消費

農牧業の地域的特色

水産業と漁場

食料需給と地域的特色

ウ エネルギー資源と原料資源

エネルギー資源の開発と需給

鉱産資源の開発と需要
林産資源の分布と開発
エ　工業化と工業地域
工業化の意義
工業立地と工業地域
オ　地域開発と環境保全
(3)　生活と地域
ア　地域の調査
イ　村落と都市
村落の成り立ちと機能
都市の機能と都市地域
都市化と都市問題
ウ　国土と住民
国家の領域と開発
国家の民族構成
エ　世界の地域
世界の地域区分
世界の地域の特色
(4)　世界と日本
ア　世界の結合
世界の交通・通信
世界の貿易
国家間の結合
イ　世界における日本

統合された新科目

地理学の体系は、一般地理学と地理学特論（地誌）とから形成されているから、後期中等教育における地理学習が系統地理的内容と地誌的内容を包含することは理の当然であり、新「地理」科の姿は正道である。しかし、正しいからといってすべて良いとは限らない。

第一の特色は、統合された「地理」の学習上の負担が従前の「地理Ａ」及び「地理Ｂ」よりも重いことである。

社会科における生徒の科目選択の決定理由の最強のものは、大学入試のさいの科目間の有利・不利の見透しであろう。この端的な現象が共通一次の各科目受験者数の毎年の変動である。激烈な受験者数の異動は、高校現場における逐年の科目選択者数の激動をもたらし、また、受験科目の選択に関する規定の変更ともなった。過去５ケ年間社会科各科目の受験者のうち、地理が最も少ないが、変動幅が小さく、しかも微増傾向にあった。これには色々の理由があるが、地理受験者数が安定状況にあったのは、「地理Ａ」及び「地理Ｂ」ともに学習負担が相対的に軽かったためである、と私は考える。それに社会科各科目の平均得点を比較すると、地理両科目は毎年、最高ではないが最低でもなく、逐年的に極端な高下がなく、全般に安定的で、とくに「地理Ｂ」にこの傾向が明確であった。すなわち、共通一次では地理は、「政経」程投機的でもなく、「日本史」や「世界史」程勉強が面倒で得点し難いこともない、という認識が生まれ、社会科大学入試戦線において、永らく傍流の感があった地理がようやく一人前として認知されるまでになった。ただし、大学側で入試二次科目として地理が採用される数は歴史より少

ないから、完全に対等といえない。とにかく、大学入試との関係で、分割された「地理A」及び「地理B」が相対的に有利と見られるに至った。

新課程を履修した後の昭和60年度からの共通一次では、統合された「地理」は「日本史」・「世界史」と競合関係に立ち、これら3科目のうちから1科目選択受験することになる。さらに「地理」で二次を受けられる大学学部の数は極めて少ない。新課程において「地理」・「日史」・「世界史」は標準4単位履修となったとはいえ、「日本史」・「世界史」は従前の標準3単位履修と実質は変化がない、と見られる。共通一次や二次の出題においても従前同様であろう。しかも、共通一次以前は社会科入試戦線の主流であった歴史2科目が共通一次の受験科目選択のさい競合した科目は「政治経済」と「倫理社会」であった。昭和60年度の共通一次からはこれらの科目は「現代社会」とともに別枠となり、「地理」は「日本史」・「世界史」との競合関係という新局面に入る。このため、新「地理」は相対的に不利になる、と私は考える。

「日本史」・「世界史」は、従前標準3単位履修であったが、今回の改訂でほぼ同じ内容を標準4単位で、ゆっくり詳しく学習できるよう、従来の欠点を克服できる方途を与えられた。しかし、「地理」は時間数が増えたが学習内容も増えたのである。学理上はより正しくなったが、負担増となった。従前より不利に改正されたのである。

第二の特色は、「地理」には系統地理的内容と地誌的内容とが包含されることになったが、これら両内容の学習の量的比率がフィフティ・フィフティでないということである。

系統地理的分野と地誌的分野の科目全体のなかの占有比率は、学習指導要領にはもちろん示されてはいない。そこで便宜上、共通一次の配点をみることにする。「地理A」及び「地理B」には、AB共通問題として2題、百点満点中40点が充てられ、系統地理的内容の出題があった。従って、地誌的分野は「地理B」のうち60点であった。すなわち、地誌的内容中心の「地理B」においても世界地誌学習の比率が科目全体の6割であった、としてよい。仮に、この共通一次の配点が内容分野の学習時間配分の、一応の、比率を示すとするならば、「地理A」及び「地理B」を対等統合した「地理」においては、地誌的分野の学習の比率が3割であり、系統地理的内容の学習が残りの7割である、としてよい。この両分野の7対3の比率が、妥当か否かの論を暫く措いて、一応の目安にはなるであろう。

従って、「地理」においては、高校地理教育で久しくそうであったように、系統地理学習が主で、地誌学習が従である。

学習指導上配慮したいこと

今回の改訂で新設された「地理」は、上述のような特色をもつから、「日本史」や「世界史」と較べて良い科目であると考え難い。この相対的不利を補うことは、実際の教育指導を措いて外ない。以下、効果ある授業を展開するため配慮したらよいと考えられることを、いくつか列挙したい。先ず、系統地理的分野の学習から考察したい。

暗記科目の印象を排する

だいたい地理は素朴な学問である。地域、または地理的現象の記述がその性格であるから、年齢が幼少の時期には、身近の地域、日本、世界と次々に拡大する範囲の地理的知識が欲求を満足させる。そして、この期間に、地理という学科は地理的事実を羅列し、地理の勉強は暗記である、という印象を定着させる。

後期中等教育の高学年に達すると、地理は生徒の頭脳を快く刺激するような高度な内容に不足する感がある。地域範囲は相変らず地球、全世界に限られる。目新しい地域が登場しないが、代って系統地理的諸観点から学習することとなる。もともと地域的現象であるものを、一般地

理学からの数多くの事項別に拾い上げる手法を取るから、無関係の事柄の暗記を要求する科目の感を与える。

わが国の高校地理教科書は、色々の発行上の制約もあり、実に多くの事柄が盛り込まれている。そして相互の関係に記述を及ぼす余裕に乏しい感が強い。学習乃至受験参考書に至っては、もっと盛沢山で詰め合わせ的な編集がめだつ。地理が暗記科目という性格づけを推進しているのは、これら教科書や参考書であるとさえ思わせられる。もちろん、この特色は、地理だけでなく、社会科の他の科目にも同じく見られる。しかも、現実の大学の入試問題は、共通一次の出題を含めて、これら教科書・参考書の記述内容だけでは解答できないものさえあるから、教科書・参考書だけを責めるわけにいかない。

所詮、地理は暗記科目であるという宿命を背負っている。地理に限らず社会科の諸科目はともに暗記を学習活動の基礎とする性格をもつ。社会科だけでなくどの教科でも暗記を回避しては学習が成り立たない。しかし、暗記のみに頼る勉強は能率が悪く、暗記一本槍の学習指導は苦役と感じられ易く、生徒の勉学意欲を大きく減殺するものである。だから昔から暗記強制を最前面に出さない教育方法が探究されてきた。良い学習指導は、生徒に心理的抵抗感を少なく円滑に記憶させる工夫が望ましいとされた。

地理の学習指導における地理的事項の実証的な因果関係の解明こそ、地理に暗記科目の印象を薄め、地理に学習の興味を呼び、地理的にものを考える力を養う最良の方法である、と私は信ずる。

実証的な因果関係の解明とは、ある地理的事実の地理学的法則との関係を指摘するにとどめないで、その事実の原因及び結果を追求し、その関係の説明のためには地理学にとどまらず他の科学からも広く知識の援助を求め、さらに、できるだけ数量的把握に努めることである。地理的現象・事実を、平板的ではなく、立体的に探究することである。“何故そうなるのか”、“その結果どう影響を及ぼすか”という視点に立ち、問題解決のためには地理科の領域に必ずしも拘束されない。このやり方が社会科「地理」の目標を達成する最善の方途ではなかろうか。

ただし、このようなやり方で授業を展開すると、学習内容の個々の項目あたりの所要時間がかなり長くなる。このため本校の教育課程において「地理」は6単位履修と決めた。しかし全内容を十分に学習し終えられるか、正直なところ自信がない。平板に急ぎ足で通り過ぎる項目もかなりあるであろう。

クイズ的性格

高校地理は、「地理B」を除いて系統地理の学習が中心であった。かって、大学受験準備勉強がかなり進み、地理の学力も相当高い生徒から“地理をどう勉強してよいか分らない”という悩みをしばしば告げられた。

日本史や世界史での受験生は、莫大で繁雑な事項を苦しい勉強の末に記憶すると、学力を自分で計算できるようになる。学力の不足部分もはっきりするから準備も適確にできる。しかし、地理は違う。というのは、どちらかといえば歴史は個を学習内容とするのに対し、地理は類型を学習対象とすることが多い。類型は多数の個から演繹または帰納されるから、地理、とくに系統地理の分野の学習は少数の説明例を挙げる方法が使われる。ある地理的現象や事項について、とてもそれを構成するすべての事例を網羅する学習はできず、また、分布図などで知ることができるが、地図では軽重を識別できないことがある。従って、地理の授業を指導する教師も入試で高得点をめざす生徒も、どれだけの事例を挙げるかの判断に苦しむことになる。入試のために地理をどう勉強したらよいか分らないのはこのためである。勉強すればする程不安になる、というのは地理の挙例の無原則性を物語るものである。

現実の問題として、一つの地理的事象に属する事例を悉皆的に学習できず、典型的な代表例を掲げることしか授業にはできない。しかし、大学入試の問題で、授業・教科書・参考書の挙例と異なった事例が出題された場合、記憶になく、類推がきかず、解答不能となる。従って、地理の入試問題はクイズ的性格をもつ。政治・経済の入試問題もこの特色がある。単なる“山かけ、山外れ”でなく、各科目自身の性格である。

当事者として甚だ好ましくないこの投機的不利から脱することができるか。私は完全に対処できないと考える。対策としては、挙例を多くすること、分布図がある場合にはその利用、問題演習などがある。これ位にして、投機的性格に賭けて、一発当たるのを待つしかないのではないか。

地誌の学習

従前の「地理B」が世界地誌の学習を中心とする科目であったのに、「地理」では地誌の学習は従となった。『高等学校学習指導要領解説・社会篇』には、時間配分についておおまかに、四大項目について「(2)　人口と資源・産業」及び「(3)　生活と地域」に全体の3分の2の時数を充てるよう書いている。世界地誌の学習をする「世界の地域」という中項目は、大項目「(3)」の四つある中項目の一つに過ぎないから、世界地誌の学習は「地理」において僅かな時間数しか配分できないことになる。

わが国の地理教育は、出発以来敗戦まで、初等、中等教育とも地誌教育を中心としてきた。戦後の地理教育は、社会科教育の一環としての役割を担うに過ぎないところから、しだいに独立的科目の性格を濃くし、とくに中等教育において然りである。そして、前期中等教育において地誌教育が、後期中等教育において系統地理教育が行われるというのが定式化した。そこへ、昭和48年から実施の「地理B」が高校にも世界地誌教育を延長した。昭和57年から再び高校から地誌教育が後退するのを眼前にして、感慨が一入である。

そこで、感情的な暴言を述べると、「地理」の内容に独立した項目として世界地誌がない方がよかった。すでにみたように系統地理的内容に地誌的内容を荷重した「地理」の学習内容は負担過重であり、中途半端な地誌学習は「地理」学習において邪魔者扱いをされることになるかも知れない。しかも、大学入試の地理の問題に多分地誌的分野から出題があろうから、全く厄介者的存在となろう。今回の改訂においては、諸般の事情から「地理A」および「地理B」総合の形の「地理」を設けねばならず、世界地誌の学習が残存することになったのであろう。願わくば、次回の改訂では系統地理一本に纏め、地誌学習は独立した別の科目にするか、または思い切って捨て去って欲しい。

しかし、現に「地理」の内容に「世界の地域」という項目が明示されている。世界地誌を回避できない。といって大幅な時間配分も望めない。一方、中学校社会科地理的分野において世界地誌が学習される。ここでは世界の諸地域における人々の生活及び地域の特色を、位置と歴史的背景、自然の特色、住民と生活、資源と産業の四つの項目を観点として学習されている。高校地理における地誌学習は、下手に取り扱えば中学校におけるものと変りばえしないことになるかも知れない。「地理」教科書が世界地誌の記述に割いているページ数が全ページ数に占める比率をみると、各社差異があり、12%から34%まで区々であるが、20乃至25%のものが多い。「地理」における世界地誌学習は精々中学校の世界地誌学習の焼直し程度しか期待できない、と総評できるのではなかろうか。

この意味から「地理」科において最も取り扱いが難かしいのは世界地誌でなかろうか。学習指導要領の「地理」の「内容の取り扱い」中に、「世界の地域の特色」については、世界の諸地域のうち、幾つかの地域を事例として取り上げて、それぞれの特色を総合的に把握させると

ともに、地域の実態を広い視野に立って探究する。その際、それぞれの地域で取り扱う内容は、自然・社会環境、人口と資源・産業、村落と都市および国土と住民の諸項目を考慮して適切に構成する、とある。従って、「地理」における地誌学習は、限られた時間内である水準の質を保持しなければならないから、取り上げる地域を少なくするしかない。

世界の地域区分

「地理」の世界地誌学習においては、従前の「地理Ｂ」におけるように世界の諸地域のすべてについて扱うのではなく、世界の幾つかの地域を選ぶのである。地域の特色の理解と、その地域を探究する方法や能力を身につけさせればよいのである。このように、現実の指導計画に幅が認められているから、教師が得意とする地域、または教え易い地域だけを摘出してもよいということになる。だが、地誌学習の際の地域区分が全く任意でよいわけでない。

地域区分には、自然・政治・経済・文化などの指標によって様々なものがあるから、安易に設定された地域区分や、任意に選抜された地域範囲は誤解を与える。地域区分による各地域の比較対照ができるものでなければならない。地誌学では地域区分は第一義に考えねばならない重要な問題である。世界地誌学習に限ってみても、地域区分は、古典的な大陸別区分法に始まり、教育目的あるいは方法から幾種類も考えられる。しかして、わが国の地理教科書の叙述によってみると、戦前、戦後を通じて世界地誌の地域区分には国別方式が主調となっている。もちろん、現・中学校も含めてである。

しかるに、現「地理」教科書の世界地誌の編集振りをみると、国別記述方式を越えた、モンスーンアジア、中近東、西ヨーロッパ、ラテンアメリカ、社会主義諸国など一括した地域として取り上げるものが多いのが目につく。この方式は高く評価したい。「地理」の世界地誌学習は、限られた学習時間の制約のうちに、中学校地理的分野の世界地誌を発展的に継承しなければならないから、国別方式よりは能率的であり、かつ、日本人の国際認識の現状から国別交渉よりも地域別理解がより実用的である、と考えられるからである。

地域の調査

身近な地域の調査研究は、地理の学習のアルファでありオメガである。高校地理教育の中に野外調査が取り入れられたのは昭和38年実施の改訂からであり、のち地域調査と名称を変えてデスクワークも容認しながら今回の改訂にも残った。

野外調査といわれた時期は地理が必修科目であった。従って生徒を校外につれ出すことは時間割上容易であった。本校でも、学校附近に一、二時間の授業時間巡検に出、また一個学年全員を終日、または一泊の日程で野外調査を実施できた。これは地学、生物と合同の現地学習で、さながらミニ修学旅行で、重要な学校行事でもあった。しかし、昭和48年実施の改訂以後は、地理も地学・生物も選択科目となったから、野外調査は廃止した。

もう学校周辺の野外調査しか実施できない。文献、統計による地域の調査を主にするしかない。

引用文献

文部省『高等学校学習指導要領』昭45

文部省『高等学校学習指導要領』昭53

文部省『高等学校学習指導要領解説・社会編』昭54

小倉幸春『地誌教育－とくに中等教育における世界地誌の取り扱いについて—』(『高校教育研究』30号）昭53、金沢大学教育学部付属高等学校高校教育研究会

小倉幸春「新地理Ｂの地域区分について」(『高校教育研究』23号）昭46

小倉幸春「本校の地理野外調査について」(『高校教育研究』17号）昭40

社会科年間指導計画

現代社会　昭和58年第1学年

	現代社会	(時数)
1年 1学期	**Ⅰ　日本の政治**	
	1　民主政治の本質	8
	Ⅳ　現代と人間	
	1　現代社会と人間	2
	2　社会集団と人間関係	3
	3　青年と人間形成	4
	Ⅰ　日本の政治	
	2　日本国憲法の基本原理	17
	Ⅴ　思想の源流	
	1　ギリシアの思想	6
1年 2学期	**Ⅰ　日本の政治**	
	3　日本政治の諸問題	4
	Ⅴ　思想の源流	
	2　キリスト教	3
	Ⅱ　日本経済と国民福祉	
	1　現代経済の特徴と働き	24
	Ⅴ　思想の源流	
	3　仏教	3
	4　中国の思想	4
	Ⅱ　日本経済と国民福祉	
	2　日本経済の現状と課題	10
1年 3学期	**Ⅵ　思想の発展**	
	1　人間の尊重	2
	2　合理的精神	2
	3　善と幸福	4
	4　個人と国家	6
	Ⅶ　日本の思想	
	1　日本的仏教の形成	3
	2　国学と儒学	3
	Ⅷ　現代の思想	
	1　実存主義	2
	2　社会主義	1
	3　プラグマティズム	1

教科書　『現代社会』東京書籍

政経　倫理　昭和59年第3学年

	政経・倫理	(時数)
3年 1学期	**Ⅱ　日本経済と国民福祉**	
	3　国際経済の動向と日本経済	8
	4　国民生活と福祉	10
	Ⅲ　国際関係と国際政治	
	1　国際関係と国家	2
3年 2学期	**Ⅲ　国際関係と国際政治**	
	1　国際関係と国家	3
	2　国際政治の変動と日本	5
	復習・問題演習	16
3年 3学期	復習・問題演習	8

教科書　『政治・経済』東京書籍
『倫　理』　東京書籍

日本史　世界史　地理　昭和58年第２学年

学年 学期	日　本　史（時数）	世　界　史（時数）	地　理（時数）
2年 1学期	Ⅰ．原始・古代　30 1.日本文化の黎明 2.国家の成立と大陸文化 3.古代国家と文化の発展 4.貴族の政治と文化	Ⅰ．先史時代　3 1.人類の起源 2.文明への歩み Ⅱ．古代オリエント世界 4 1.オリエント世界の形成と発展 Ⅲ，西アジア世界　2 Ⅳ．地中海世界　13 1.ギリシア人の国家と文化 2.ローマの興隆と衰退 Ⅴ．南アジア・東南アジア世界　8 1.インド文明の起源と古代インド史 2.東南アジアにおける国家の形成	Ⅰ．自然　42 1.気候 2.地図 3.地形
2年 2学期	(続)貴族の政治と文化 Ⅱ．中世　28 1.武家社会の形成と文化の動向 2.武家社会の展開と文化の普及 Ⅲ．近世　44 1.封建社会の確立と文化の動向	Ⅵ．東アジア・内陸アジアの世界　10 1.中国の古典文明と統一国家の出現 Ⅶ．中世ヨーロッパ世界 20 1.中世ヨーロッパ世界の形成と発展 Ⅷ．近代ヨーロッパの形成　9 1.ヨーロッパ世界の拡大 2.18世紀のヨーロッパ	(続)地形 Ⅱ．住民　9 1.人口 2.国家と民族構成 Ⅲ．第一次産業　18 1.林業、水産業 2.農牧業 3.食料需給
2年 3学期	(続)封建社会の確立と文化の動向 2.体制の動揺と文化の成熟	Ⅸ．イスラム世界　10 1.イスラム教の成立と発展 2.トルコ民族・モンゴル民族のイスラム国家 Ⅹ．東アジア世界の展開 8 1.８～13世紀の変革と中華帝国の繁栄	Ⅳ．第二次産業　18 1.エネルギー資源と鉱産資源 2.近代工業と工業地域

日本史　世界史　地理　昭和59年第3学年

学年 学期	日本史 (時数)	世界史 (時数)	地理 (時数)
3年 1学期	(続)体制の動揺と文化の成熟 Ⅳ．近・現代　48 1.近代国家の成立と展開	Ⅺ．近代初期のヨーロッパと世界　5 1.重商主義の時代 Ⅻ．欧米近代社会の展開 1.アメリカの独立革命 2.フランス革命とナポレオン 3.ウィーン体制と自由主義・ナショナリズム XIII．ヨーロッパの進出とアジア　5 1.オスマン＝トルコ・インドをめぐる情勢 2.植民地支配への抵抗	Ⅴ．生活と地域　30 1.地域開発と環境保全 2.村落 3.都市 4.交通運輸 5.貿易 6.国際関係
3年 2学期	(続)近代国家の成立と展開 (2)国際情勢の推移と日本の動向	XIV．帝国主義時代　9 1.帝国主義の世界支配 2.第一次世界大戦とロシア革命 XV．大戦間の世界　18 1.第一次世界大戦後の国際秩序 2.世界恐慌とファシズムの台頭 3.第二次世界大戦 XVI．現代世界　9 1.冷たい戦争と東西対立 2.第三勢力の台頭と緊張緩和 3.現代世界と南北問題	Ⅵ．世界地誌　36 1.発展途上国 2.社会主義諸国 3.先進資本主義諸国
3年 3学期	(続)国際情勢の推移と日本の動向　12	XVII．復習講義　12	Ⅶ．復習講義　12

教科書『詳説日本史』山川出版社　『新世界史』山川出版社　『高等地理・最新版』帝国書院

『高等地図帳』二宮書店